

経営リースの取組事例

「愛知県の畜産環境リース事例について」

愛知県 農林水産部畜産課 主任 丸山実博
東三河農林水産事務所田原農業改良普及課 専門員 黄木憲秀

1 愛知県の畜産概要

愛知県の平成18年度の農業産出額は3,108億円で、うち畜産業が約25%を占めています。家畜飼養頭数(平成20年2月現在)は、乳用牛35,700頭(全国第7位)、肉用牛59,300頭(全国第15位)、養豚378,300頭(全国第9位)、採卵鶏10,491千羽(全国第3位)と、いずれの家畜も全国の上位を占める、畜産業が盛んな県です。また、県内畜産農家の約60%が知多半島と渥美半島の両半島に集中しているのが特徴です(図)。

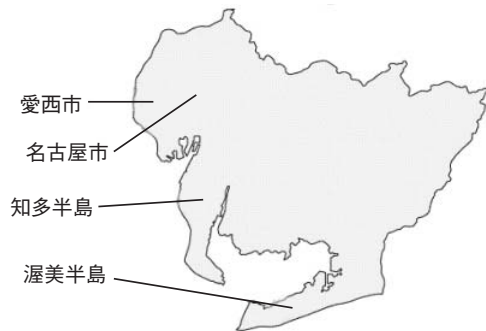


図 愛知県地図

2 畜産環境リース事例について

愛知県では、平成9年度から平成19年度までに131戸の畜産農家で1/2補助付きリース事業を実施し、家畜排せつ物法に係る適正管理に努めてきました。

その中で今回は、畜産環境整備機構が利用実態調査のため、平成20年7月11日に県内畜産農家の施設を視察したので、その状況を報告するとともに、もうひとつの情報として施設園芸農家にたい肥を供給している畜産農家についてご紹介します。

3 畜産環境整備機構による利用実態調査

県の西端にある愛西市(名古屋市近郊の海拔0メートル地帯)で畜産業を営み、たい肥処理及び販売に力

を注ぐ酪農家3戸を調査しましたが、その内容は以下のとおりです。

○加藤康利氏の現況

加藤氏は平成10年度に発酵ハウスとたい肥舎を整備し、約200頭の乳用牛のふんを処理しており、調査当日も発酵良好なたい肥ができあがっていました(写真1)。また、製品たい肥は2tトラック(配達料込み)で耕種農家へ販売するとともに、近隣耕種農家へは飼料袋に詰め放題で安価に提供しています。当日も耕種農家数名が処理施設に来て、各自で袋詰めしており、地域に密着したたい肥生産をされていることが印象的でした。



写真1 加藤氏の発酵ハウス

○平野英治氏の現況

平野氏は平成14年度に発酵ハウス・乾燥ハウスを整備し、約55頭の乳用牛のふんを処理しており、こちらも発酵良好なたい肥ができあがっています(写真2)。また、たい肥は近隣耕種農家へ全て販売しています。平野氏は、「リピーターを確保するためには必ず良質たい肥を提供していくことと、積極的な営業活動が重要。」と盛んに主張され、聞いている側もすっかり平野氏ペースにはまり、この話術がたい肥販売に活かされていることがうかがえました。



写真2 平野氏の発酵ハウス

○飯田雅美氏の現況

飯田氏は平成16年度に浄化槽を整備し(写真3)、約55頭の乳用牛をつなぎで飼養して尿を浄化処理する、県内では特徴的な処理方法の農家です。当日も息子さんがSVを測定している最中で、しっかりと日常管理が行き届いていました。また、たい肥については地域の耕種農家へ還元できるように、自己資金で堆肥散布車を購入し、販売にも前向きに取り組まれています。



写真3 飯田氏の浄化槽

以上、3戸の畜産農家さんを短い時間で回りましたが、皆さん、共通して畜舎及びふん処理施設の整理整頓が行き届いているとともに、たい肥の有効利用のため、それぞれ独自の工夫がなされている様子を、十分に畜産環境整備機構の方々にご理解いただけたと思います。

4 施設園芸農家にたい肥を供給している畜産農家

本県東三河南部に位置する渥美半島は、県下有数

の畜産地帯であり、この地域で神谷秀昭氏(写真4左)は、経産牛約70頭の酪農経営を営んでいます。



写真4 神谷氏と高平氏

以前は、自家で排出される家畜ふん尿を、需要期には牛舎から出たままの状態ですぐ露地野菜農家に提供し、不需要期には自分の畑でたい肥化処理を行っていました。

しかし、周辺環境への配慮等から、平成14年度(稼働は平成15年6月)に1/2補助付きリース事業で、乾燥ハウス及びたい肥舎を整備しました(写真5・6)。



写真5 神谷氏の乾燥ハウス



写真6 神谷氏のたい肥舎

現在のたい肥製造方法は、搾乳牛舎のふんと育成・乾乳のふんをたい肥舎で混合し、乾燥ハウスで水分を飛ばした後、たい肥舎にて切り返し処理を行ってたい肥を生産しています。できたたい肥は、露地野菜の農家に対して散布して広げるまでの作業を行っています。

たい肥の流通については、この渥美半島は、野菜の大生産地でもあり、秋冬作としてキャベツ・ブロッコリーが約3,000haも作付けされていますが、露地野菜向けのたい肥の需要期は3月から8月までの約半年間だけの状況にあります。このため、せっかく良質たい肥を生産しても、半年間は保管する必要があるため、多くの畜産農家ではこの不需要期の保管に苦勞をしています。しかし、神谷氏は不需要期のたい肥流通を図るために、通年利用できるトマト・メロン・キク（これらも大生産地）をはじめとする地域の施設園芸農家にたい肥を利用してもらうことを目的として、良質たい肥の生産に力を入れてきました。現在では、この努力が実を結び、年間を通して生産したたい肥が流通できるようになりました。

この神谷氏のたい肥を利用しているキク栽培農家の高平氏（写真4右・7）からは、このたい肥について、「そのままでも利用できる良質たい肥を供給して



写真7 たい肥を利用したキク栽培

いただいている」と評価されており、神谷氏は今後もこの地区でたい肥を利用してもらうため、供給先である耕種農家側の意見を取り入れ、さらに良質なたい肥生産を行っていかれる考えの様子であり、たい肥利用に積極的に取組まれるとても参考となる事例の一つです。